

## モンゴル語族の動詞屈折の諸問題

東京外国語大学世界言語社会教育センター講師

山田洋平

yamadabayar@tufs.ac.jp

### 1. はじめに

本発表ではモンゴル語族の諸言語に関する研究(以下、モンゴル語学)における動詞屈折の扱いについて先行研究をまとめ、その問題点や課題を述べる。その上でモンゴル語族の史の変遷を動詞屈折の観点から考察する。

次節では本発表で扱うモンゴル語族の諸言語について簡略にまとめる。3. では本発表で問題とする動詞屈折について概観する。4. ではモンゴル語族の各言語における様相をまとめ、5. で考察する。6. で全体のまとめと今後の展望を示す。

### 2. モンゴル語族とは<sup>1</sup>

#### 2.1. 分布

モンゴル語族とは、モンゴル語を含む語族であり、モンゴル国を中心にロシア、中国の諸地域に分布する言語のグループである。このうち最大の言語はモンゴル国や中国内モンゴル自治区で使用されるモンゴル語である。この他モンゴル語の北側に分布するブリヤート語、西側に分布するオイラト語のほか、中国甘粛省、青海省やアフガニスタンにも話者数の少ないモンゴル系の言語が分布している。

モンゴル語族の諸言語の分布を次ページの図1に示す。本発表では便宜上モンゴル語族を北方の諸言語と南方の諸言語に分類するが、このうちまず図1で色を塗った北方の諸言語について以下に紹介する。

モンゴル語族最東端に位置するのはダグール語という言語で、中国内モンゴル自治区のフルンボイル市から黒竜江省にかけて分布する(図1中の緑部。新疆にも分布。略号 Dag.)。話者数は10万人ほどと見積もられる。

現代モンゴル語は、モンゴル国の広い地域で用いられるハルハ・モンゴル語と、内モンゴル自治区東北部で用いられるホルチン・モンゴル語、その他に分類される(図1中の赤部。略号 Xal, Xor)<sup>2</sup>。話者数は600万人ほどである。

---

<sup>1</sup> 本節2.1.の記載内容は2020年9月11日『外国語と日本語の対照言語学的研究』第30回研究会における山田発表の「モンゴル語族の動詞否定形式」配布資料2.1.~2.2.節とほぼ同じ内容である(最終段落の中期モンゴル語に関する記載のほか、若干の変更を加えてある)。

<sup>2</sup> 「内モンゴルのモンゴル語」というと一般には標準音として採用されたチャハル・モンゴル語を指す場合が多いが、話者人口で言えばハルハ・モンゴル語とホルチン・モンゴル語が二大勢力であると言える。この他に、バーリン、ハラチン、オルドス、アラシャーなどの地域変種も認められる。

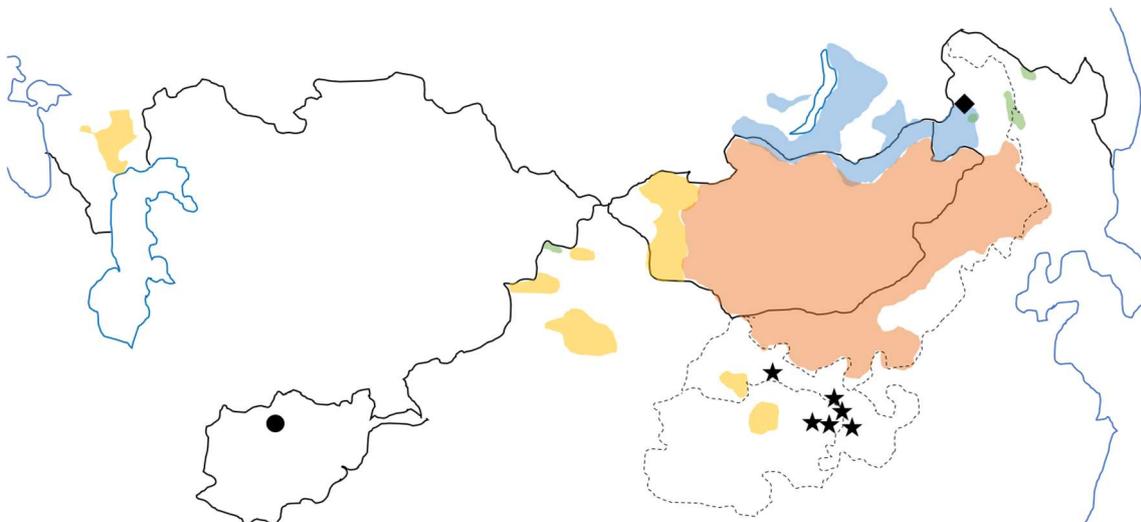


図1. モンゴル語族の分布<sup>3</sup>

その他、現代モンゴル語の北方にはブリヤート語(図1中の青部、略号 Bur.) およびハムニガン・モンゴル語(図1中の◆とその近隣地域。略号 Xam.)、西方にはオイラト語(図1中の黄部、最西端カスピ海西岸の言語はカルムイク語と呼ばれる。略号 Oir.)がある。

アフガニスタンにはモゴール語(図1中の●)が分布する。

中国甘粛省や青海省には図1中★で示した諸言語があり、本発表ではこれらをまとめて南方の諸言語と呼ぶ。以下の図2に略号と共に示す。



図2. モンゴル語族の分布(南部の諸言語<sup>4</sup>)

<sup>3</sup> 基本的に栗林(1992: 511)〈図1〉を参照し、◆については山越(2007a)を参考にして作成した。概略的なものであり、行政区画を参考に線を引いた部分もある。小さな言語集団については◆、●、★の記号で凡その地点を示した。★は詳細を図2で示すが、いずれも凡その地点を指したものに過ぎない。

<sup>4</sup> 図1(注3)同様、栗林(1989)を参照し、マングエル語についてはSlater(2003)を、カンジャ語については斯琴朝克图(1999)を参考に作成したが、やはり凡その地点を指すものである。

これらの他、本発表では、文献言語である中期モンゴル語(略号 Mid.)についても扱う。文献によって辿りうるモンゴル語族の古形である。本発表ではとくに13世紀に原文が編まれたとする『元朝秘史』(小澤 1997: 317)に現れる言語を指して扱う場合がある。『元朝秘史全文検索システム』<sup>5</sup>によれば、総語数は29549語である。この言語は現代モンゴル語の書き言葉に影響を与えた言語である。

## 2.2. 言語の特徴

モンゴル語をはじめモンゴル語族は形態的には接尾辞型であり、語順類型からすると主要部後置型であり、「日本語に似ている」と言われるような様相を見せる。例(1)に示すハルハ・モンゴル語の例<sup>6</sup>では、属格や対格、奪格といった格や、動詞の屈折が接尾辞によって表されていること、動詞述語がその項より後ろに位置していること、被修飾語が修飾語の後ろに現れること(öröön-ii түлхүүр「部屋の鍵」)などが見て取れる。

### (1) [Xal.]

öröön-ii түлхүүр-iiг xaan-aas aw-č bol-ox=we?  
room-GEN key-ACC where-ABL to.take-SIM to.become-FUT=Q

「部屋の鍵をどこで受け取ればいいですか？」(山越 2012b: 36)

「日本語に似ている」と言い難い文法現象としては、形容詞的な語が形態的には名詞類に属することはおそらくモンゴル語族共通である。この他、次のダグール語の例(2)に見るような名詞項に付される所属のカテゴリ(ここでは再帰所属 -REFL)や、動詞に先行する否定要素、主語に一致する述語人称を有する言語もある。

### (2) [Dag.]

weer-ii bait-aa weer-d-ee ul med-ǰ+aa-b=taa=yee?  
self-GA thing-REFL self-DAT-REFL NEG to.know-SIM+COP=2PL=Q

「あなた方は自分のことは自分で知らないのですか。」(恩和巴图(編)1988: 322)

こうした基本的な構造は、大枠においてモンゴル語族に共通するものである。

<sup>5</sup> 蒙古秘史全文検索システム: (<http://mnunits.com/> 2020/09/11 確認)

<sup>6</sup> ここではハルハ・モンゴル語とモンゴル国で行われる現代モンゴル語書き言葉を同一のものと考えて扱う。モンゴル国で行われる書き言葉はロシア文字をもとにした新モンゴル文字を用いる。本発表では新モンゴル文字を次のようにラテン字転写して示す。a:a, б:b, в:w, г:g, д:d, е:ye/yö, ё:yo ж:j, з:z, и:i, й:i, к:k, л:l, м:m, н:n, о:o, ө:ö, п:p, р:r, с:s, т:t, у:u, ү:ü, ф:f, х:x, ц:c, ч:č, ш:š, ш:čš, ь:"", ы:ij, ь:'э:e, ю:yu/yü, я:ya。なお、接辞には母音調和の原則によりいくつかの異形態を持つものがあるが、この代表形を表すのに A, AA などラテン字の大文字を用いることがある。他の言語についても同様である。

### 3. 動詞屈折の諸問題

#### 3.1. 概要

モンゴル語学において、様々な動詞の屈折形式は定動詞形、分詞形、副動詞形という3種類に分類されるのが一般的である<sup>7</sup>。これはそれぞれの屈折形式をとった動詞が主節の述語になるか(定動詞形)、名詞節または連体修飾節の述語になるか(分詞形)、副詞節の述語になるか(副動詞形)という機能による分類である。

動詞の屈折は前節でみたように接尾辞によって表され、それぞれ定動詞接辞、分詞接辞、副動詞接辞を動詞語幹に付すことで表される。これらを総称して動詞接辞と呼ぶ。動詞接辞は基本的に互いに範列的な関係を成す。

次節ではこうした分類に関する問題について先行研究での指摘を簡略にまとめる。

例えばハルハ・モンゴル語には次のような動詞接辞がある。

表1. ハルハ・モンゴル語の動詞接辞

定動詞接辞	(叙述)	-nA 非過去「～する」, -w 過去①「～した」, -IAA 過去②「～した」, -jee 伝聞過去「～したそうだ」
	(希求)	-ø 命令「～しろ」, -AArAi 依頼「～してください」, -AAč 軽い命令「～してくれ」, -g 第三者への命令, -yA 意志・勧誘「～しよう」, -tUgAi 願望①「～ようになれ」, -gtUn 願望②「～ようになれ」, -sUgAi 願望③「～ようになれ」, -AAsAi 願望④「～になればなあ」
分詞接辞		-x 未来「～する(こと)」, -dAg 習慣「～する(こと)」, -sAn 完了「～した(こと)」, -AA 未完了「～している(こと)」
副動詞接辞		-j 不完了「～して…」, -AAđ 完了「～し終えて…」, -n 複合「～して…」, -sAAr 継続「～し続けて…」, -mAAr 願望「～したく…」, -wč 逆接「～するが…」, -ngAA 同時「～しながら…」, -xlAAr 直後「～してすぐ…」, -mAgc 即時「～するとすぐ…」, -ngUUđ 即時「～するとすぐ…」, -tAl 限界「～するまで…」, -wAl 条件「～したら…」

(山越 2012b: 88 を参考に作成。屈折と一部の接辞の名称、表記は本発表のものに変更)

#### 3.2. 分詞形の問題点

こうした従来の動詞屈折の分類に関しては、山越 (2012a) がモンゴル語について「形動詞」「副動詞」等に分類される接辞の形態統語的機能が一樣ではない」ということを指摘し

<sup>7</sup> これらの名称については必ずしも一般的ではない。とくに本発表における分詞(形)とは、従来は日本語で形動詞(形)と呼ばれてきたものである。本発表ではこれについて山越(2017)に倣って分詞という用語を用いる。こうした分類は「ロシア語やアルタイ諸言語の文法記述で用いられるものである(山越 2012a)。

ている<sup>8</sup>。これに関して風間 (2003:325-327) はトルコ語 (チュルク語族)、モンゴル語、ナーナイ語 (ツングース語族)、および朝鮮語、日本語の動詞屈折に関して、従来の「定動詞」「形動詞 (本発表における分詞)」「副動詞」という用語を拡張し、再分類を試みている。ここで表1で分詞形とした動詞接辞について、風間 (2003) の分析を (3) にまとめる。

### (3) [Xal.]

形・名・定動詞 (連体修飾節、名詞節、主節の述語になる機能を有する)

-dAg 習慣

-x 未来 (定動詞の場合、後続要素を必要とする)

-AA 未完了 (基本的に後続要素が必須)

形・定・名・副動詞 (連体修飾節、主節、名詞節、副詞節の述語になる機能を有する)

-sAn 完了 (付帯状況を示す副動詞的用法がある)

この分析では、4つの形式の大きな違いが「副動詞的用法」の有無であると見ているようであるが、それぞれに付された「後続要素を必要とする」「後続要素が必須」という条件があることも、これらの4つの形式がここでいう機能の面で決定的に異なっていることを指摘したい。

こうした分詞形の機能については、中期モンゴル語においても一様ではなかったようである。山越 (2014)、Yamakoshi (2016) は『秘史』モンゴル語 (文献「元朝秘史」に基づく中期モンゴル語の一種) の分詞形が主節で用いられるかどうかについて次のように分析している。

### (4) [Mid.] (山越 2014: 30-59 を参照し発表者がまとめたもの)

現在・未来 V-QU 連体修飾節・名詞節の述部になり、疑問文・否定文や条件節の帰結文などのような場合は主節の述部にもなる。

未完了 V-AA 主節の述部になり、連体修飾節・名詞節を成しているかに見える例は特殊なものである。

完了 V-QSAN 連体修飾節・名詞節の述部になり、主節の述部にならない。

---

<sup>8</sup> 山越 (2012a) は他に「どの接尾辞をどの分類に含めるべきかという点でゆれがみられる」ことも指摘している。例えば表1で副動詞形に含まれる -mAAr 願望 は、風間 (2003: 327) では「形・名動詞」(連体修飾節と名詞節の述語になる) とされているなど、先行研究により扱いが異なる。分詞形+格に由来する形式も、その機能から副動詞接辞 (<分詞接辞+格接辞) であると分析されることもある。さらに言いさし文になりうるものについて、主節の述語となる用法があると見做して良いのかといった問題もある。

動詞屈折に関する問題としては他に、3分類で良いのかという問題もあるだろう。例えばモンゴル語の節連結に関して Janhunen (2010) は *conjunct* / *disjunct* に分けて分類しているが、副動詞接辞についても単純に「副詞節の述語を成すもの」と一括りにして良いのか議論の余地がある。定動詞接辞については、むしろ従来は表1におけるように叙述と希求 (あるいは、時制と結びつく形式と人称と結びつく形式) などと分類されることもよくある。本発表ではこの点について十分に検討せぬまま、次章以降では叙述の形式のみを対象として考察している。

これはそれぞれ (3) に挙げた分詞形 *-x* 未来、*-AA* 未完了、*-sAn* 完了に対応すると考えられる形式である (*-dAg* に対応する形式については用例数が少なく分析されていない)。

次章ではこうした問題を踏まえて、モンゴル語族内の比較を試みる。

#### 4. 言語間の比較

以下ではモンゴル語族の各言語にどのような動詞屈折が認められるのかを一覧にして概観する<sup>9</sup>。本発表では叙述定動詞形と分詞形についてのみ扱うこととし、希求定動詞形と副動詞形については別の機会に考察することとしたい。

なお、以下は先行研究の記載を参考にまとめたものであり、発表者自身が実例に当たって調査したものでない点を断っておく。いずれも他の言語、とくにモンゴル語または中期モンゴル語における3分類が念頭にあって整理されているものである。そこでは、語源的に対応するものと、意味または機能的に対応するものが混在している可能性がある点に留意したい。実際には使用頻度や文体差なども問題になるが、言語ごとに詳細なチェックを経たものではない。

定動詞形は非過去 (4.1.) と過去 (4.2.) で分け、分詞形は広く用いられる未来と完了 (4.3.) とその他 (4.4.) で分けて整理・考察する。

##### 4.1. 非過去定動詞形

次の表2に定動詞形のうち主節において非過去時制を表すものを一覧にした。

このうち [Mid.] 以下 [Oir.] までは、これらの接辞と動詞否定形式が共起しないという特徴を共有する<sup>10</sup>。[Dag.] は非過去定動詞形に2形式有り、肯定と否定で使い分けられる。

[San.] 以下の言語は述部で命題の主観・客観の区別をする文法形式を有するが、非過去定動詞形やこれに後続する要素などによって区別することはないようである。カンジャ語 [Kan.] では非過去定動詞形の *-ni* は一人称主語の際に使用される (斯琴朝克图 1999: 143) との記述があるが、これは分析が進めば主観・客観の対立を反映したものと解釈できる可能性もある。

---

<sup>9</sup> 以下、表2~5はそれぞれ次の文献を参照してまとめた。Mid.: 嘎日迪 (2006), Xam.: 山越 (2007a,b), Bur.: 山越 (2005, 2006), Xor.: 查干哈达 (1996), Oir.: Birtalan (2003), 确精扎布 (等編) (1987), Mog.: Weiers (2003), Yug.: 保朝鲁、贾拉森 (编著) (1991), Tu.: 清格尔泰 (编著) (1991), Man.: Slater (2003), Kan.: 斯琴朝克图 (1999), Bon.: 陈乃雄 (1987), San.: 布和 (编著) (1986)

<sup>10</sup> 中期モンゴル語については山田「モンゴル語族の動詞否定表現」(詳細は注1を参照のこと)で調べたところによると頻度が低く共起しにくいというべきものであった。また山越 (2005: 205-206) によるとシネヘン・ブリヤート語をはじめとするブリヤート語諸方言では、*jab-na-gui=sj {to.go-NPST-NEG=2SG}* のように非過去定動詞接辞の後ろに否定を表す要素が後続する否定表現が存在するという。この点でブリヤート語は「共起しないという特徴を共有する」の例外である。ただし、この表現は「話者の期待に反する事態であること」を示すもので、一人称とは共起しない (山越 2005: 206)。こうした意味や用法の特殊性がある点で、「普通の否定は共起しない」とは言えるかもしれない。中期モンゴル語における少数の共起事例についても、同様の説明ができるのではないかと考える。

表 2. 非過去定動詞形<sup>11</sup>

Mid.	-mU(i) が多勢。その他、-sU(i), -yU(i) (「演繹的現在」(小沢 1993)), -u
Xam.	-nAn
Bur.	-nA
Xal.	-nA
Xor.	-n(A)
Oir.	-n(A) 書き言葉では -mUi (narrative), -nAm など
Dag.	-bei, -n
Mog.	-n(a) (, -m, -n :narrative)
Yug.	-ni:, -nAn (~ -nAm ~ -m)
Tu.	-m (~ -n)
Man.	-ni (future), -kunang
Kan.	-na, -ni (~ -ne, -n, -ŋ, -m) ※客観、主観の対立か?
Bon.	-na, -m
San.	-nə, (-mu : interrogative)

語源的には、[Mog.] 以下の言語で交替形に子音 m を含むものが (ときに、自由異音として?) 現れることから、中期モンゴル語 [Mid.] の -mU(i) を古形として > -m > -n といった言語変化がモンゴル語族全体に起こったものと考えられる<sup>12</sup>。オイラト語 [Oir.] の文語などに見られる -nAm の語形や、ダグール語 [Dag.] の2形式をどのように説明するのかという疑問が残る。ダグール語の -bei については、過去定動詞接辞 -bA(i) (表 3. [Mid.] 参照) に由来するとする説もある (恩和巴图 (編) 1988: 303)。

<sup>11</sup> それぞれの接辞の代表形は、母音調和による母音の交替形、前後の環境により変化する子音の交替形などにつきラテン文字の大文字を用いることで表した。交替形の現れ方は言語ごとに異なるものであり、統一的なものではない。以下同様である。

<sup>12</sup> モンゴル国で行われる書き言葉では、/ŋ/ と区別するための綴りの仕組みとして -nA と記す。(A), (a) などと記載される音は、文末であるという語気により添加される要素、あるいは終助詞的なものと解釈できるのではないかと予測する。またこうした根拠で [Mog.] 以下の言語についても子音 n の後ろの母音 (が中期モンゴル語の -mU(i) と合わないこと) が説明できるのかはなお検討を要する。

#### 4.2. 過去定動詞形

次の表3に定動詞形のうち主節において過去時制を表すものを一覧にした。

現代モンゴル語では過去時制を表す定動詞形に3つあるとされる(ex.「動詞の過去形には三種類ある」小沢 1994: 45)。現代モンゴル語においてこれらを同じカテゴリーにまとめて良いのかは検討の余地があるが、モンゴル語族の各言語ではこれらと起源を同じくするであろう形式が用いられているため、ここでは一つにまとめて示した。言語ごとに使い分けや意味・用法の違いがあることから、ここではあくまで参考として中期モンゴル語 [Mid.] についてのみ嘎日迪 (2006) による意味を記載するに留めた。

表3. 過去定動詞

Mid.	-IAGA(i) (~-IA'A(i)~- IU'A(i)) 近過去	-bA(i) 過去完成	-JUGU(i) 過去持続
Xam.	-IAA	-bA	-zie
Bur.		-bA	
Xal.	-IAA	-w	-Jee
Xor.	-IAA	-b(AA)	-J(ee)
Oir.	-IA	-w(A)	-j(i)
Dag.	-IAA		
Mog.	-IA	-BA	-ZA
Yug.		-βA	-dʒ(ə)/-ʃ(ə)
Tu.		-va	
Man.		-ba	-jiang
Kan.		-va (~ -ba, -pa)	-dʒa (~-ʃa)
Bon.		-wa, -θ (積石山方言)	-te
San.		-wo	

表中の空欄網掛け部は、対応形式が無い(参照した文献に記述されていない)ことを表す。形式が記述されていても、[Mid.] -bA(i)に対応する形式については、懐古的な文体に用いら

れるというブリヤート語(シネヘン・ブリヤート語)、疑問文あるいは書き言葉にのみ現れるハルハ・モンゴル語、疑問文や注意喚起文に用いられるホルチン・モンゴル語のように文体的あるいは話者の態度による使用の制限がある言語もある。

日常会話では過去時制を表すのに分詞形が用いられるというハムニガン・モンゴル語の例に見るように、ここに示されたものが過去時制を表すのに典型的な形式であるとは限らない。例えばハルハ・モンゴル語でも話し言葉としては表3に示す形式の頻度は相対的にやや低い。ダグール語でも-IAAは詞的な文体に限られ、過去時制を表すのには分詞形が用いられる。

-IAGAと同系統と見られる形式は[Yug.]以下の言語で見られない。一方、-bA(i)と同系統と見られる形式は[Dag.]以外で見られる(この点、ダグール語[Dag.]の非過去-beiが-bA(i)に由来するという説を後押しする)。

また動詞の後ろに否定要素を置くことで否定を表現する[Xam.]~[Oir.]の言語では、これらの過去定動詞形に否定要素を置くことはできず、いずれも意味的に対応する分詞形に置き換えなければならない点も特徴的である。

#### 4.3. 未来分詞形と完了分詞形

次ページの表4に未来分詞形と完了分詞形をまとめた。(3)で見たように風間(2003)はモンゴル語における両形式がいずれも主節での述語となる用法があると見ている。未来分詞形については「定動詞の場合、後続要素を必要とする」との注記があるが、この点は看過できない。ハルハ・モンゴル語において未来分詞形が主節の述語らしくふるまうのは、直後に①否定を表す要素を置いた否定形式、②疑問を表す要素を置いた疑問文、③「もの」という語に由来する語を置いた表現、④三人称の人称所属の要素を置いた表現に限られる<sup>13</sup>。このうち①~③は完了分詞形も取ることが可能な形式・表現であるが、これと同時に①③は定動詞形には取ることの不可能な形式・表現である(5)。

(5) [Xal.]	完了分詞	未来分詞	非過去定動詞形	過去定動詞形
何も後続しない	*-x	-sAn	-nA	-IAA    -w    -jce
①否定	-x-güi	-sAn-güi	*-nA-güi	*-IAA-güi    *-w-güi    *-j(ce)-güi
②疑問	-x=UU	-sn=UU	-nA=UU <sup>14</sup>	-IAA=yUU    -w-UU    -j=UU
③もの	-x yum	-sAn yum	*-nA yum	*-IAA yum    *-w yum    *-j(ce) yum

(\* (アスタリスク) はその組み合わせが不可能であることを示す)

<sup>13</sup> 存在動詞 bai が未来形動詞形を取ると上述の①~④の表現とならずとも主節の述語としてふるまうように見えるが、これは一種の固定的な表現であると考えられる。また、未来形動詞形の後ろにコンピュータ動詞や「なる」という意味の動詞を伴うものなども、ここでは主節で述語を成すものと見做さなかった。

<sup>14</sup> この形式は [Xal.] において普通の疑問というより依頼のニュアンスで用いられるものである(存在動詞/コンピュータ動詞 bai と共に用いられると普通の疑問)。[Xor.] では同形式が普通の疑問の意味で用いられる。

こうした用法の分布を見せる点で、定動詞形と同じような「主節の述語になる用法がある」と見てはいけないのではないだろうか。

なお、中期モンゴル語(ここでは『秘史』モンゴル語)ではこの分布が全く異なる。山越(2014)の分析(4)では、現在・未来分詞形 V-QU(本発表における未来分詞形、表4.では -QU(n/i))は「疑問文・否定文や条件節の帰結文などのような場合は主節の述部にもなる」とあり、後続要素無しに主節の述語となる例が多数あるようである。他方、完了分詞形 V-QSAN(表4.では -GsAn~-GsAd)は「連体修飾節・名詞節の述部になり、主節の述部にならない」とあり、ハルハ・モンゴル語の話し言葉において過去時制を表す主節の述語として頻繁に用いられるのと対極にある。

表4.ではこれらの点を加味し「後続要素無しに主節の述語になれるもの」に○を付けた。

表4. 未来分詞形と完了分詞形

	未来分詞形	完了分詞形
Mid.	-QU(n/i) ○	-GsAn~-GsAd
Xam.	-ku ○	-xAn ○
Bur.	-xA ○	-hAn ○
Xal.	-x	-sAn ○書き言葉では頻度少
Xor.	-x	-sn
Oir.	-x ? 発表者が見た範囲では不可	-sn (-ksn: folkloric) ○
Dag.	-g <sup>v</sup>	-sen ○過去時制として普通
Mog.	-ku ? 調べられず	-xsan ~ -xsah ~ -xsad ... ?
Yug.	-Gə ? -Gu 「未来」と別ならば×	-(g)sAn ? 語気詞を伴う例のみ
Tu.	-gu(n)	-san
Man.	-ku(ni) ? 調べられず	-sang(ni) ? 調べられず
Kan.	-gu ~ gun	-sun
Bon.	-gu (~gə~-gu)	-saŋ ○
San.	-ku	-san

今回発表者が調べた限りでは当該要素が主節の述語になりうるかについて記述のないものもあり、限られた資料しか見ることができていない。表4に記載しなかった事項として、[Yug.]以下の言語([Man.]は不明)には主観・客観の区別を述部で示す文法形式があり、これを表す助動詞が後続した場合に、それぞれ両形式は主節の述部の一部を成すことができるようである。

この限りにおいて表4から次のようなことが分かる。両形式が後続要素無しに主節の述語として機能する言語はモンゴル語族全体ではあまり普遍的でなく、北部に限られる。さらに現代語において未来分詞形が後続要素無しに主節の述語になれる言語はハムニガン・モンゴル語[Xam.]とブリヤート語[Bur.]のみであるのに対し、完了分詞形はそれよりやや広く分布している。

#### 4.4. その他の分詞形

ここでは表1で見た分詞形のうち、残りの習慣分詞形と未完了分詞形をまとめる<sup>15</sup>。次ページの表5で見ると、これらは必ずしもモンゴル語族の言語に広く見られるものではない。[Man.]以下の言語には見られないようである。過去定動詞形における-AGA対応形式の欠如(表3)や完了分詞形の主節述語用法の欠如の分布を考えるとシラ・ユグル語[Yug.]、モンゴル語[Tu.]も習慣分詞形と未完了分詞形を欠いていても良さそうだが、欠いていないのは周辺言語の影響か。モンゴル語[Tu.]については語形が異なる(意味的に対応する別物である)とも考えられる。モンゴル語[Tu.]と近い関係にあるマンゲル語[Man.]でこれを欠くのは単に記述漏れか、あるいはこれを動詞屈折のカテゴリに含めるかどうかの判断が異なったためであるかもしれない。

筆者の観察ではホルチン・モンゴル語[Xor.]では両形式の使用は自然ではないのはいかと思えるが、この言語では書き言葉としてのモンゴル語の影響もあり、当該形式が無いのかどうか判断するのが困難な側面がある。この点、今後の調査の課題としたい。

風間(2003)は(3)でモンゴル語の形・名・定動詞として-AA未完了を挙げ、基本的に後続要素が必須であるとした。発表者の観察ではこの要素はハルハ・モンゴル語において、①直後に否定を表す要素を置いた否定形式として頻度が高く、②直後に疑問を表す要素を置いた疑問文は話し言葉で用いられ、③その他存在動詞/コピュラ動詞と共に共起する場合に主節で述語のようにふるまう。山越(2014)では、中期モンゴル語(『秘史』モンゴル語)においてこの要素が主節の述語としての用法が多数で、その他に未完了分詞形とのみ現れる否定形式や、コピュラと共に現れる例があることが示されている。

表5では後続要素無しに主節で述語として用いられることが明記してある[Mid.][Xam.][Bur.]の未完了形動詞形にのみ表4に倣って○を付したが、これ以外については有無を調べられていない(○が無いことが、主節述語用法の欠如を意味するものではない)。

<sup>15</sup> このほかに -ge という接尾辞が同じカテゴリーに入れられることがあるが、これは屈折接辞というよりは派生接辞に属するものであると考え(山田2014)。

表5. 習慣・未完了・主体形動詞形の有無

	習慣	未完了
Mid.	-dAG 用例少ない	-GA ○主節でのみ使用
Xam.	-dAg	-AA ○
Bur.	-dAg	-AA ○
Xal.	-dAg	-AA 主節では限定的
Xor.	-deg (要調査)	(要調査)
Oir.	-dAg	-AA, -hAA (not active)
Dag.	-del, -AAč 限定的	
Mog.	? 調べられず	? 調べられず
Yug.	-dAG	-(G)A: 主節可。否定無し
Tu.	-dzin	
Man.		
Kan.		
Bon.		
San.		

## 5. 考察

モンゴル語族における未来分詞形と完了分詞形は、主節で述語として用いることが可能であるかどうかギャップがある。このギャップが生じた要因は、そもそも同じ分詞形と括弧に問題がある、すなわちもともと別物であったとして考える必要がある。

また、主節で典型的に述語として用いられると考えられる定動詞形の使われ方も考慮する必要がある。

表6では、これまでの表2~5のうち、非過去定動詞形と過去定動詞形(現れがまちまちな-JUGU(i)対応形を保留)、未来分詞形、完了分詞形、未完了分詞形(習慣分詞形は主節の述語としての使用可否について十分に調べられなかったため保留)を一覧にまとめたも

のである。表では、その形式がないものと、主節で述語として用いられないものに網掛けを付した。「?」には薄い網掛けを付した。

表6. 表2~5. の抜粋まとめ

	非過去	過去		未来分詞	完了分詞	未完了分詞
Mid.	-mU(i), etc.	-lAGA(i)...	-bA(i)	-QU(n/i)	-GsAn...	-GA ○
Xam.	-nAn	-lAA	-bA	-ku ○	-xAn ○	-AA ○
Bur.	-nA	※ <sup>16</sup>	-bA	-xA ○	-hAn ○	-AA ○
Xal.	-nA	-lAA	-w	-x	-sAn ○	-AA
Xor.	-n(A)	-lAA	-b(AA)	-x	-sn	?
Oir.	-n(A)	-lA	-w(A)	-x ?	-sn ○	-AA ?
Dag.	-bei, -n	-lAA		-g <sup>w</sup>	-sen ○	
Mog.	-n(a)	-lA	-BA	-ku ?	-xsan ~?	?
Yug.	-ni:, -nAn		-βA	-Gə ×	-(g)sAn ?	-(G)A
Tu.	-m		-va	-gu(n)	-san	
Man.	-ni		-ba	-ku(ni) ?	-sang(ni) ?	
Kan.	-na, -ni		-va...	-gu...	-sun	
Bon.	-na, -m		-wa...	-gu...	-saŋ ○	
San.	-nə		-wo	-ku	-san	

この表から見いだせることを以下に列挙する<sup>17</sup>。

<sup>16</sup> 参照する文献によってはこれに対応する形式が掲載されているものもあるが、本発表では反映させることができなかった。4. 冒頭で問題にしたように、使用頻度や文体差などによって当該形式の有無や分類についても判断が変わることがあるものと考えられる。

<sup>17</sup> 表からははっきりと見いだせないが予想される点として、次の点も指摘しておく。すなわち過去定動詞接辞 -bA(i) 対応形式はダグール語を除く全ての言語で見いだされるが、完了形動詞接辞 -GsAn 対応形式が主節の述語として機能しうる言語では、-bA(i) の使用頻度は低いであろうという点である。ただし、対応形式が (少なくとも過去時制を表すものとしては) 見いだされないダグール語 [Dag.] から、疑問文であれば比較的よく使用されるハルハ・モンゴル語 [Xal.] まで、その「使用頻度」の程度には差がある。

・-IAGA(i) 対応形式を有さない言語は、未完了分詞形を有さない。

この点、未完了分詞形を有さないダグール語 [Dag.] と、有するシラ・ユグル語 [Yug.] が特殊である。ダグール語は過去定動詞 -bA(i) 対応形式を有さない点でも特殊である。

・-IAGA(i) 対応形式を有さない言語は、完了分詞形の主節で述語として用いられる用法を有さない。

この点、完了分詞形の主節で述語として用いられる用法を持たない中期モンゴル語 [Mid.] とホルチン・モンゴル語 [Xor.]、持つポーナン語 [Bon.] が特殊である。

・未来分詞形の主節での述語として用いられる用法を持つ言語は、未完了分詞形の主節で述語として用いられる用法も持つ。

これはブリヤート語とその影響を受けた言語のみの特徴か。中世モンゴル語もこれに似るが、山越 (2014) の指摘するように限定的である。

・中期モンゴル語を、上掲のその他すべての言語の共通祖語であるとする、例えば仮に次のような言語変化があったとまとめられる。

未来分詞形も完了分詞形も主節述語可: [Xam.] [Bur.]

未来分詞形は使用条件の制限を緩和し広く使われるようになる

完了分詞形は主節で述語として用いられるようになる

完了分詞のみ主節述語可: [Xal.][Oir.][Dag.][Bon.]

未来分詞形は使用条件の制限が厳しくなり、後続要素を伴うようになる。

完了分詞形は主節で述語として用いられるようになる

いずれも主節述語不可: 上記以外の言語

未来分詞形は使用条件の制限が厳しくなり、後続要素を伴うようになる。

完了分詞形の一部は後続要素を伴えば主節で述語として用いられるようになる

■ 未来分詞形は (非過去定動詞形の要素が収束するのと並行的に ?) 後続要素を伴わなければ主節の述部の一部を成せなくなるという変化を経た。[Xam.][Bur.] における未来分詞形は、古形を保持しているというよりは、一度伴うようになったなんらかの後続要素を脱落させたものである<sup>18</sup>。

ここで、次のような疑問も生ずる。完了分詞形が主節の述語として用いられる言語には、過去定動詞形 -IAGA(i) 対応形式を有する。またモンゴル語族全般にわたって過去定動詞形

<sup>18</sup> 山越 (2014) は従来成されてきた「コピュラの省略による分詞形の主節述語化」について慎重な立場を取っている。本発表では「なんらかの後続要素」としたが、ここでは他の言語において未来分詞形を主節の述部の一部として成立させるための要素、例えば [Xal.]「もの」に由来する文末表現、[Dag.] 終助詞的要素 =dAA、あるいは [Yug.] 以下の言語にみられる主観・客観の別を表す助動詞のようなもの、が脱落した後続要素の候補となる。

-bA(i) 対応形式は普遍的に存在する。すでに少なくとも2種類の「過去形」を有する言語で、完了分詞形を新たに「過去形」として導入したのはなぜかという点について、現時点では次のような仮説を立てるにとどめる。

未来分詞形が主節の述語としてほとんど用いられないのは、どの言語も無標の非過去定動詞形1形式を有するからである。[Xal.]~[Dag.]で否定、疑問その他後続の要素を伴い、[Tu.]~[San.]で主観・客観の区別を表す助動詞を伴って、それぞれモダリティ的に有標な述語表現として主節に現れるようになった。

逆に過去時制においては「過去形」がもともと複数あったことで、無標の「過去形」導入のきっかけになったのではなかろうか<sup>19</sup>。

## 6. おわりに

本発表では、モンゴル語族の動詞屈折の3分類に関する一般的な問題を取り上げ、分詞形と呼ばれるものの内実が雑多なものであるという従来の指摘を紹介した。この上で、動詞屈折から見たモンゴル語の言語史は「分詞形」を統一的に扱うよりは、定動詞形との関わりの中で検討すべきであるという提案をした。

今回は基本的に先行研究の記述をもとにまとめたものであるが、主節でどのように用いられるかといった点は記述(の参照)が不十分な部分もあり、ダグール語をはじめ要となる言語の調査も進めて行く必要がある。

## 記号一覧

ABL: 奪格 ACC: 対格 COP: コピュラ DAT: 与位格 FUT: 未来 GA: 属対格 GEN: 属格 NEG: 否定 NPST: 非過去 PL: 複数 Q: 疑問 REFL: 再帰 SIM: 同時

## 参考文献一覧

保朝魯、贾拉森(編著)(1991)『东部裕固語和蒙古語』蒙古語族方言叢書. 呼和浩特: 内蒙古人民出版社.

Birtalan, Ágnes. (2003) OIRAT. in Juha Janhunen (ed.) *The Mongolic Languages*. pp218-228. London: Routledge.

布和(編著)(1986)『東郷語和蒙古語』蒙古語族方言叢書. 呼和浩特: 内蒙古人民出版社.

查干哈達(1996)『蒙古語科尔沁土語研究』北京: 社会科学文獻出版社

陈乃雄(1987)『保安語和蒙古語』蒙古語族方言叢書. 呼和浩特: 内蒙古人民出版社.

恩和巴圖(編)(1988)『達斡爾語和蒙古語』蒙古語族方言叢書. 呼和浩特: 内蒙古人民出版社.

嘎日迪(2006)『中古蒙古語研究』沈陽: 遼寧民族出版社.

---

<sup>19</sup> Benjamin (:13) は中期モンゴル語 [Mid.] における過去定動詞形の3形式を直接情報の -IAGA と間接情報の -JUGU(i) に分け、-bA(i) は「問題のない事実」に用いられるとしている。ハルハ・モンゴル語 [Xal.] については、-bA(i) 対応形式に替わり完了分詞形 -sAn が「定着した知識」(ibid. 16) であるという。いずれも証拠性の点からは中立的であるとしつつ (ibid. 42-43)、慎重に区別をしている点でこの中立性には差異が認められるとの判断であろう。

Janhunen, Juha A. (2010) *Mongolian*. London Oriental and African Language Library 19.

Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins Publishing Company.

風間伸次郎 (2003) 「アルタイ諸言語の3グループ(チュルク、モンゴル、ツングース)、及び朝鮮語、日本語の文法は本当に似ているのか: 対照文法の試み」アレクサンダー・ポビン、長田俊樹(編)『日本語系統論の現在』. pp249-342. 国際日本文化研究センター.

栗林均 (1989) 「シロンゴル・モンゴル語」 亀井孝・河野六郎・千野栄一『言語学大辞典』第2巻 世界言語編(中). pp279-280. 東京: 三省堂.

\_\_\_\_\_ (1992) 「モンゴル諸語」 亀井孝・河野六郎・千野栄一『言語学大辞典』第4巻 世界言語編(下-2). pp517-525. 東京: 三省堂.

小澤重男 (1997) 『元朝秘史(下)』 東京: 岩波書店.

清格尔泰(編著)(1991)『土族語和蒙古語』蒙古語族方言丛书. 呼和浩特: 内蒙古人民出版社.

确精扎布(等編)(1987)『卫拉特方言话语材料』蒙古語族方言丛书. 呼和浩特: 内蒙古人民出版社.

斯琴朝克图 (1999) 『康家語研究』中国新发现語言研究丛书. 上海: 上海遠東出版社.

Slater, Keith W. (2003) *A Grammar of Mangghuer A Mongolic language of China's Qinghai-Gansu Sprachbund*. London: Routledge.

山田洋平 (2014) 「モンゴル語の形動詞接辞 -gŋ—共時的な使用実態から—」東京外国語大学記述言語学論集『思言』10. pp251-261

山越康裕 (2005) 『シネヘン・ブリヤート語の語形成』北海道大学博士論文.

\_\_\_\_\_ (2006) 「シネヘン・ブリヤート語」中山俊秀・江畑冬生(編)『文法を描く1 フィールドワークに基づく諸言語の文法スケッチ』. pp271-298. 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.

\_\_\_\_\_ (2007a) 「ハムニガン・モンゴル語」中山俊秀・山越康裕(編)『文法を描く2 フィールドワークに基づく諸言語の文法スケッチ』. pp229-258. 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.

\_\_\_\_\_ (2007b) 「ハムニガン・モンゴル語テキスト: 日常会話を題材にした基本文例集」. 津曲敏郎(編)『環北太平洋の言語』14号. 北海道大学大学院文学研究科. pp119-158.

\_\_\_\_\_ (2012a) 「シネヘン・ブリヤート語の「形動詞」」『北方人文研究』5号, pp95-111.

\_\_\_\_\_ (2012b) 『詳しくわかるモンゴル語文法(CD付)』 東京: 白水社.

\_\_\_\_\_ (2014) 「『元朝秘史』における分詞(形動詞): 主節述語用法を中心に」東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 AA 研フォーラム 口頭発表

Yamakoshi, Yasuhiro. (2016) Predicative non-past participles in The secret history of the Mongols. in *Altai Hakpo* 26. pp85-101. The Altaic Society of Korea.

Weiers, Michael. (2003) MOGHOL. in Juha Janhunen (ed.) *The Mongolic Languages*. pp248-264. London: Routledge.